



『もっと！！本野通信』

No.88

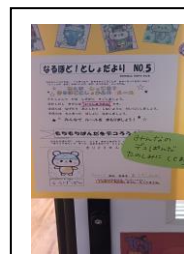
諫早市立本野小学校長 永 井 洋

読書の秋特集

図書室がにぎわっています。図書担当の先生や図書館運営支援員の先生、図書ボランティアの皆さんの工夫で、貸出冊数も増え、読書の本が一杯になってきました。嬉しいですね。

先日、「学校にない本を読みたい」というリクエストがありましたので、市の図書館にお願いして20数冊貸していただきました。個人への貸し出しはできませんが、図書室の畳のコーナーに常設しています。いろいろな本に出会ってほしいですね。

このように、図書館教育に関わる皆さんが、様々な工夫をして、子どもたちの本への関心を高めています。入口のデコパンダのコーナーもとても面白いですよ！！図書ボランティアも随時募集中です。



不易と流行③（最終）

20数年前、21世紀に入る頃に、「教え込んではならない」、「子ども主体の活動を仕組むべきだ」という教育論が流行しました。そこでよくあったもの（今でも時々みかけます）が、「活動あって学びなし」という現象です。「子どもが意欲的に活動する場があればよい」という考え方により、教師の出番、指導、確認がおろそかになりがち」になっていました。子どもたちの振り返りには、「楽しかった」ばかりが先行し、何を学んだのか、何が身に付いたのかが見えにくくなっていたのです。それでは、学力低下を起こしかねないということで、「教えて考えさせる学び」が叫ばれるようになります。これは、言葉の通り、教師が指導すべきことはしっかり指導し、考えさせましようという学習スタイルです。このように、時代によって異なった教育論や方法が、繰り返し叫ばれていたのです。

今、国は「令和の日本型教育を進めましょう」と言っています。この言葉だけでは、「？」ですので少し説明すると（これは私の受け取り方です、もしかすると違うのかもしれません）「令和の」ですから「これまでも」日本型教育があったのです。それは、「子どもたちの知育・徳育・体育を一体的に育てていく学校教育」のことです。知は、「学習機会と学びの保障」徳は、「全人的な発達と成長の保障」体は、「身体的・精神的な健康の保障」などを目指しています。これに「令和の」がくっついたわけです。どのような内容になるのでしょうか。もう皆さんも気付かれてはいると思いますが、わたしたちが、小学生のころ～10年ほど前には、なかったものや、あまり聞かなかった言葉がそれに当てはまります。（一人一台端末・個別最適な学び・協働的な学び・GIGAスクール構想…など多数）

つまり、すごく簡単に言うと、「日本型教育（不易）に、新たな動きを加味しながら（流行）、子どもたちの知・徳・体の力を伸ばしていく」教育が「令和の日本型教育」だと私は捉えています。

あと5年もすれば、学習指導要領は新しく改訂されるようです。10年、20年後、義務教育はどのようなスタイルになっているのでしょうか？楽しみでもあり、不安な部分もありますが、不易の部分が少しでも残っていてほしいなと思います。 おわり